



| | |
|--------------|---|
| Title | 公的賃貸集合住宅における自主緑化の実態およびその支援手法に関する研究 |
| Author(s) | 生川, 慶一郎 |
| Citation | 大阪大学, 2003, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/44288 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。 |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 なる 生 かわ 川 けい いち ろう
慶 一 郎

博士の専攻分野の名称 博 士 (工 学)

学 位 記 番 号 第 1 7 8 7 0 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 15 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

工学研究科建築工学専攻

学 位 論 文 名 公的賃貸集合住宅における自主緑化の実態およびその支援手法に関する研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 柏原 士郎

(副査)

教 授 舟橋 國男 教 授 吉田 勝行 助教授 吉村 英祐

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、高密度・高層化する都市における緑と共存する集住環境の構築を目標に、公的賃貸集合住宅における自主緑化の支援手法に資する基礎資料を得ることを目的としており、その内容は以下の8章から成り立っている。

第1章では、研究の背景、意義・目的、関連する既往の研究において本研究の位置づけを行い、研究の方法、論文の構成により本研究のフローを明記した。

第2章では、建物緑化の現状の把握、90年代の集合住宅における建物緑化の動向、および自主緑化が積極的に行われている集合住宅の事例紹介を通じて、近年の集合住宅における緑化の現状について概観した。

第3章では、観察調査によりバルコニー、玄関前、住棟周辺における緑化状況図を作成し、それをもとに集合住宅における自主緑化の分布状況およびその特徴を把握した。

第4章では、建て替えが実施された集合住宅を対象として、属性の特定できる世帯に限定して、建て替え前後における住戸近傍部分の空間特性の変化と自主緑化の実態の変化を比較し、世帯構成の変化による影響を受けない空間特性の変化が自主緑化の実態に与える影響を明らかにした。

第5章では、第4章の追跡調査としてバルコニーおよびバルコニーに面する居室の家具・物品配置図を作成し、バルコニーおよびバルコニーに面する居室の利用の特徴を把握した。また、バルコニー面積および居住階がバルコニーにおける自主緑化の実態に与える影響について分析を行い、集合住宅の高層化に伴う防災上の安全面を考慮に入れた、自主緑化を支援するバルコニーの典型的なモデルの一つを提案した。

第6章では、集合住宅における自主緑化に対する住民意識および住民の属性が自主緑化の実態に与える影響を明らかにし、自主緑化を好む住民の属性を特定するとともに、事業の計画段階において自主緑化を支援する住戸プランおよびその戸数を決定する基礎資料を得た。

第7章では、集合住宅における共用部分の管理方法が自主緑化に与える影響を明らかにするとともに、実際に自主緑化を支援している公団賃貸集合住宅を対象に、その支援システムの住民評価を行い、その有効性について検証した。それらの結果から集合住宅における自主緑化の支援する共用部分の管理手法を提案した。

第8章では、各章のまとめを行った。本研究の成果として、建築計画、事業計画、管理計画、以上の三つの視点からアプローチした、公的賃貸集合住宅における自主緑化の支援手法を提案した。

論文審査の結果の要旨

本来、住居にあっても接道部分は視覚的には公共性の高い空間であり、自己所有の敷地内にある庭園であっても地域への開放に配慮すべきであるが、慣習・文化・環境などから、今日のわが国の接道景観は閉鎖的かつ無味乾燥なものとなっていることが多いように思われる。しかし、下町地域などの路地において所狭しと並べられている鉢植えに見られるように、高密度化する都市において現在もお息づいている緑もある。また、ヨーロッパ諸国では、バルコニーにベコニア等の花を飾って道行く人々の目を楽しませていることは知られるところである。今後の独立住宅、特にマンションなどの集合住宅の計画にあたっては、その形態を問わず、鉢植えなどでバルコニーや玄関前を飾れるようにするなど、地域の緑化に役立てられるような建築的配慮が最低限必要となるであろう。

本論文は、集合住宅のバルコニーや玄関前などに住民が自主的に植木鉢やプランターなどを住戸廻りに飾るという集合住宅における自主緑化に注目している。高密度・高層化が進み緑の更なる減少が危惧される都市において、緑と共存する居住環境の構築に貢献する基礎資料を得ることを目的としており、集合住宅における自主緑化の実態を把握するとともに、①建築計画、②事業計画、③管理計画の三つの視点から支援する手法を提案するものである。

本研究の成果を要約すると次の通りである。

- (1) 集合住宅における自主緑化の分布状況およびその特性を把握し、建て替えが実施されている公団賃貸集合住宅を対象に、空間特性の変化が自主緑化に影響を探るとともに、住戸内の家具配置やバルコニーの利用状況の観察・ヒアリング調査を通して自主緑化を支援する集合住宅の計画手法として、住棟周辺・配置の計画手法、玄関前の計画手法、バルコニーおよびバルコニーに面する居室の計画手法を提案している。
- (2) 集合住宅における自主緑化に対する住民意識およびその構造を把握し、住民の属性が自主緑化に与える影響を探ることで、事業計画の際に集合住宅において自主緑化を支援する住民の属性の特定に資する基礎資料を得ている。
- (3) 集合住宅の共用部分の管理方法が自主緑化に与える影響を探るため、ケーススタディとして自主緑化を支援している公団賃貸集合住宅を対象にその支援システムの住民評価を行うことにより、共用部分における自主緑化を支援する管理計画に必要と考えられる要素の抽出を行っている。

以上のように、本論文は近年、多方面で議論されている都市における緑化のあり方について、集合住宅における自主緑化に着目し、それを支援する手法について建築計画、事業計画、管理計画の三つの視点から提案をおこなったものである。今後の高密度・高層化が進む都市において、いかに緑と共存できる豊かな居住環境が構築できるかといった課題に対して大きな示唆を与えうるといえる。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。